



## 障害をもつ幼児の保育(25)

—この子と出会ったとき—

津守 真 (M)

津守 房江 (F)

## 水が大好きな子の『お魚物語』

『お魚物語』のはじまり

F 私が忘れられない金魚についての子どもの情景  
があるのですが……。

弥富<sup>ヤトミ</sup>というところにある保育園を訪ねたときのこ

と、バケツに入れて流しの近くにおいてある金魚を、三歳の男の子が全く無造作に手で掴んで高いところに置いてある立派な水槽に“ひよい”と入れたのです。下のバケツには小さな金魚が入れてあつて、上の水槽には上等の金魚が泳いでいる。その中

に小さな金魚を背伸びして殆ど投げ入れるようにしたその姿に、驚きました。

M うちでは金魚はとても大切にして病気になる薬を塗ったり、死ぬとお墓をつくったからね。お魚は子どもと同様に、か弱い『命』そのもの思ってた。

F ええ。それでその子を注目して見ていると、トースターの中におもちゃを入れたりする「いろいろ」遊びが多いのです。

その子はおばあちゃんに連れられてお姉ちゃんを送り迎えに毎日ついて来ていた。この日はこの男の子がやっと憧れの保育園に入園して二日目だったそうです。

M ああ、それで「いれる」遊びをしたのかな。

F 後で分かったことですが、このあたりは金魚の生産地で、この子のうちも金魚を生産している家だそうです。

小さいバケツから大きな立派な水槽に、手でくって金魚を移したのは、自分が保育園に入園して嬉しかったように金魚も入れてやろうとしたのでしようね。

自分のことをお魚だと思っているのか

F その保育のビデオを見ながら、私はこんなに命を粗末にしているのかと思っていました。保育者の正義感みたいなものが胸に沸き上がってきていました。今考えると私の見方が浅くてお恥ずかしいのですが……。

M 大人の正義感のことはちょっとわきに置いておいて（笑い）。

私は今の話聞いてひとりの子どものことを考えました。以前にも話したことがあるかもしれないけれど、川の流れが大好きで学校に来る前に公園の池の橋からずーっと水を見ていた男の子のことで

す。それで、学校にはなかなか到着しません。でも担任はじめみんなが待っていました。それがだんだん遅くなって、学校が終わるところから夕方に登校するようにになりました。学校にこない日もあります。東京タワーでお魚の水槽を見て時間がかかってしまうこともありました。来ればトランポリンを飛んだり楽しく遊んで帰るのですが。

F この子にとっては自分のペースで水の流れのよ  
うに、自由に伸びやかに生きていますね。もし  
かしたら、自分のことをお魚と同一化しているのか  
しら。

M そう、そう。トランポリンを飛ぶとき両手を合  
わせてくねくねと左右に揺らすんです。はじめ私に  
は何をしているのか分からなくて、この子は私に一  
生懸命話をしていると注意されたんです。よく見る  
とその手は魚の尾鰭のように見えるんです。

F 私共の家の子ども一人も、水が好きで学校で

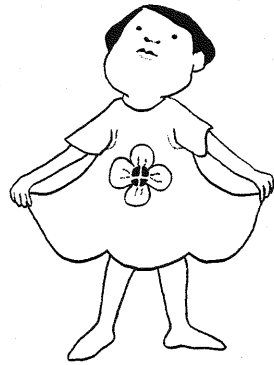
想像の世界を描くことがあったとき、水の中の世界  
を描きました。その絵は女の子が水槽の中にきれいな  
ひらひらした赤い服を着て座っているのです。水  
槽の中には小石が敷き詰めてあってそれが一粒ずつ  
丁寧を描かれていて、現実感を感じさせるのです。  
M ああ、あの絵は私も覚えてるよ。子どもの中  
には水の自由さと自然さを生きている子どももい  
る。

F つまり、お魚と共感するものがあるのですね  
え。その程度は個人によつて違いがあるでしょうけ  
れど。

大きなお魚が欲しい。

でもすぐには手に入らない

M 養護学校の子どもに話を戻すと、ある日、母親  
や担任の先生からこの子が促されるようにして、私  
に頼んできたのは大きな細長いお魚を買って欲しい



ということなんです。それが何百万円もするとい  
うことなので先生たちも困って津守先生に聞いてみ  
ようということになったのです。

私も困ってその子に「困ったなあ、欲しいよなあ」  
と言って一緒に困っていました。私がなんと応える  
か、職員たちが私を見つめているのが分かりまし  
た。

F ああ、そこが大事なですね。すぐに手に入る  
とはかぎらない。でも欲しい気持ちは分かる、何と  
かしてあげたいけれどできないということを伝える

のですね。

M 丁度その週、岐阜の中部学院大学の先生と話  
しているとき、子どもがお魚を欲しがっている話に  
なったのです。その先生も弥富での研究会に来てい  
たので、とうとう金魚屋さんから宅急便で送つても  
らえることに話がついたんです。

もちろんそんなに高価じゃあないけれど、それで  
もうちでは買ったことのないような十分立派な金魚  
でした。

F それでうちの古い水槽をきれいにして小石も  
洗って運んでつたんですね。子どもはどうなりまし  
た？

大人が子どもの願いにそうように

動き出しただけで変わった

M 実際に金魚が来るまでにはちよつと時間がか  
かったけれど、子どもはもうじき金魚がくると聞い

た次の日から毎日学校に来るようになりました。

F そうそう、T君が何時に登校したというのを、あなたが帰ってくると一番に教えてくれるので私も楽しみでした。こちらが何とかして子どもの願いに応えようとしただけで状況が変わるのですね。

M 水槽に手を入れ、金魚を手にとってスキンシップを楽しんだので、弱ってくるのは早かったです。

F お魚はスキンシップを楽しむのには向いていないですね。以前のように私が「命を大事にしないではいけない」という正義感で子どもを見るだけでは、この子の心を生かすことは出来ないことがよく分かりました。

M 母子はその後、お魚やさんで大きな鯛を買って学校に来るようになりました。それを学校の庭で火を起こして塩焼きにしました。夕方お魚を焼く匂いが流れるのは、何とも言えない生活感があっていいものですよ。

F みんなで食べたのですか。

M ええ、先生たちも集まって来ておいしく賑やかに食べました。

### 『お魚物語』のおわり・

#### とびきりの笑顔の毎日

M この子は火を起こしてお魚を焼く手順や実際を全部知っています。このごろはお魚ではなく焼き鳥をしたり、だんだん変わってきているようです。

F 大人の疲労とか、いろいろ考えなければならぬことはあると思いますが、子どもは成長とともに変わるでしょうし、必要な今というときに、みんながひとりの子どもの願いに応えようとして一生懸命になることは素敵なことですね。

子どもがにこにこして毎日学校にやってくるとう話を聞くと、そのことが親たちと先生たちへの子どもからのプレゼントだと思えます。